

ハイデガー『存在と時間』における「自己という事実」

青木孝介 AOKI Kousuke

本稿は、2014年度比較文学専攻提出論文「ハイデガー『存在と時間』における『自己という事実』」の要旨である。

本論文は、哲学者マルティン・ハイデガーの著作、『存在と時間 (Sein und Zeit)』を、「自己」という観点のもとに読解することを試みるものである。すなわち、『存在と時間』において、ハイデガーが「自己」をどのように取り扱っているのかを彼のテキストにそくして検討し、彼が述べている「自己」が「自己という事実」であることを明らかにしようとするものである。

ハイデガーは、その考究の端緒として、哲学が「自己」という事柄や「存在」というものを自明なものとして取り扱ってきたことを批判する。このような、哲学の歴史を通じて形成されてきた先入見を自覚しつつ、ハイデガーはそれらの覆いを取り外しながら、存在や自己について考究を重ねて行くのである。

それでは、ハイデガーは『存在と時間』において、自己についてどのような考察を行っているのだろうか。まず、ハイデガーの自己論を検討してゆきたい。

ハイデガーはカントを批判しつつ、自らの言わんとする「自己」について述べてゆく。ハイデガーによれば、カントは正当にも自己を実体的なものであるとは捉えなかった。しかしそれにもかかわらず、カントは自己を主観として捉えたことによって、自己が客体的な対象物であるという、デカルト以来の哲学的伝統に陥ってしまっていると、ハイデガーは批判するのである。

デカルトは「われ思う、故にわれあり」と規定したものの、「思うわれ」が現に存在しているとはどのようなことであるのかについては規定せずにいた。ハイデガーは、思考する自己はとりもなおさず「世界」の内であって何かを考えているのであると言う。すなわ

ち、ハイデガーにおいては、自己はそれ自体独立で存在しているものであるとは考えられておらず、その内で自己が生きているところの世界と切り離して考えることは出来ないものとしてある。このように、自己というものを「個」的なものとして捉えず、外部との関わりの中で把握してゆくことが、常にハイデガーの語る自己の前提なのである。これらの前提を元に、ハイデガーの展開する存在論に則して、そこに現れている自己の在り様を明らかにしてゆく。

ハイデガーは、自らの存在論を展開するために、まず「現存在 (Dasein)」という存在者を設定する。この存在者を設定するに当たり、ハイデガーは哲学において自明視されてきた存在を正しく問うことの必要性を強調する。問いは、何かを明らかにするために、明らかでない何事かに向けられる。このとき問いは、それが明らかになろうとしていることに規定されているとハイデガーは言う。

『存在と時間』において明らかにされようとしている事柄は、存在である。ならば、存在への問いは、あらかじめ存在によってある程度まで規定されているはずである。存在への問いが、どのような形であれ可能であるということは、存在を問うわれわれ自身が、すでにして存在というものを不明瞭ながら了解しているということ、すなわち「存在了解 (Seinsverständnis)」を有しているということの意味するのである。そして、このような存在了解のうちで生きているということが現存在の「事実 (Faktum)」としてある。この事実の「事実性 (Faktizität)」が、現存在の存在の重要な要素として問題になる。なぜならば、この「事実性」は、「固有な (eigenen)」現存在に関わるものだからである。

現存在が「固有である」とは、形容詞“eigen”が「自己である」という意味にも捉えられることから、現存在が「自己である」ということであると解釈できる。そして、現存在が自己であること自体は決して客体化できる事柄ではない。これらの意味において、現存在の事実性とは、現存在が固有の自己であるという事態に関わるものなのである。

このように、自らの存在に関する存在了解のうちで、「事実」として存在しながら、おのれの存在について問うことが出来るものこそ、現存在なのである。より詳しく述べれば、現存在は、自らの存在と関わり、それに規定されながら、自らを規定している自らの存

在そのものを問うことの出来る存在者なのである。このことから、現存在の存在は、現存在の自己と抜きがたい関わりを有しているのであると言える。

ハイデガーは、このような現存在と存在の問いとの関わりについて、その再帰性を指摘している。現存在は、自らの存在について、言わば自己自身に問いかけてゆくことになるのであるが、ここでは、自己の二重化が起こっていると言える。二重化とは、すなわち異質化のこともである。自己を異質化することで、現存在は、日常的な自らの在り様を問題化することが出来るようになるのである。言い換えれば、現存在が事実的に自己という在り様で存在しているという事態を、現存在は問いによって明らかにしてゆくことが出来るのである。

現存在の自己は、また「実存 (Existenz)」の問題とも深く関わってくるものである。ハイデガーによれば、実存は、現存在が関わる存在そのものであり、かつ現存在が「自らの存在を存在しなければならないこと」をその本質とするという。このことは、上に述べた現存在の事実性と関係する。すなわち、現存在は事実として存在しているが、このことは、「自らの存在を存在しなければならない」という仕方では現れているのである。ハイデガーに従えば、現存在は実存からおのれの存在を了解しており、さらには、「自らの存在を存在しない」という可能性をも、その存在の内に含みこんでいるのである。

この実存という概念は、現存在の具体的な自己の在り方であるといえるが、さらにここで、現存在が自己であるということの意味を、「各自性 (Jemeinigkeit)」という概念を元に検討してゆく。

上に述べたように現存在は事実性や実存によって特徴付けられるのであるが、現存在の存在は、いつも「私の存在」として、すなわち、客体化され得ない特別な問題として現れてくる。

このことから、ハイデガーは、現存在の「各自性」という性格を導出してくるのである。これは、現存在が各自「私」として存在の問いを遂行するのであるということを表す。各自性において、現存在は「私のもの」としての存在を問題化せねばならないのである。この存在は、決して客体化され得ないものであることは、先ほどから述べている通りである。

現存在にとって各自性は、自らが問うところの存在が、自らの存在以外にはありえないことを示すものである。この自己の存在は、自己の固有な存在を存在しないことをも含意しつつ、現存在をその存在へと導く通路になり得るのである。

ハイデガーは、現存在が自らの存在に問いかけてゆくときには、現存在の「世界内存在 (In-der-Welt-sein)」という存在の「構え」を元にしてそれを行ってゆくのであるという。では、「世界内存在」とはどのような事柄であるのだろうか。

ハイデガーは、「世界」というものを、何か現存在とは別個の事柄として捉えるのではなく、むしろすでにして、現存在が世界の内存在しているということを強調する。すなわち、現存在が独立した「主観」として、自らの外にある「客観的」な対象物を認識するというのではなく、その「主観」としてあるということ自体が、世界の内存在している現存在の一つの在り方なのであると、ハイデガーは捉えるのである。主観が世界を認識するのではなく、逆に世界が無くては主観ということもまた成立しないのである。

現存在はその都度すでに存在の内存在しているが故に、その自己もまた、世界の内存在している。世界の内存在している現存在の自己について、ハイデガーは「本来性 (Eigentlichkeit)」および「非本来性 (Uneigentlichkeit)」の論点を導入する。

ハイデガーによれば、現存在は各自性に基づいて、自己に固有の問題として本来的（自己に固有である）であったり、非本来的（自己に固有でない）な在り方をしているという。このとき、「本来的」とか「非本来的」という言葉によって、ハイデガーがある種の価値判断を行おうとしているのではないことに気をつけなければならない。これらの言葉は、あくまでも現存在がその可能性の間を揺れ動きつつ生きていることを示しているのであり、この双方とも、現存在に不可欠の可能性なのである。

世界の内存在し、そこで日常を送っている現存在にとって、「自己」とはあくまでも存在の一つの在り方でしかなく、その自己でさえも、ある仕方では現存在の存在が「誘惑的」に与えるのであるかもしれないとハイデガーは言う。すなわち、「自己である」ことすら、現存在にとって自明ではなく、却って日常的な自己の在り様によって、現存在がおのれ自身を見損なうことがあり得るのである。

現存在は世界の内では存在しているのであるが、その世界はまた、他者と共有している世界でもある。ハイデガーに従えば、現存在はさしあたって日常的には、他者と自己自身とを区別しない。日常において現存在は、他者と共有している世界の内では、固有の自己自身ではなく単なる中性的な「ひと (Das Man)」として存在しているのである。

「ひと」という在り様において、現存在は非本来的に、すなわち固有の自己で無く存在しているのであると言える。ただし、「ひと」としてあるからといって、現存在の自己が現に存在していないというわけではない。本来性と非本来性が現存在に備わる両義的な可能性であるのならば、たとえ非本来的に存在しているとしても、そこで本来性への通路が閉ざされるわけではない。非本来性の在り方をしている「自己ではない自己」が現に存在しているという事実から、現存在がおのれに固有の存在を、おのれ自身に問いかけてゆく契機は、常に存在しているのである。ここから、世界の内では存在している現存在が、世界の内では存在しているおのれ自身の姿である「内存在 (In-Sein)」の問題が派生してくる。

「内存在」とは、ハイデガーによれば、「住んでいる」とか「委ねられている」という在り様において世界の内では存在している現存在の姿である。さらに現存在 (Dasein) は、その都度自らの「そこ ("Da", 現存在の「現」)」を存在しており、この「そこ」において自分自身に対して現存在は自己を開示しているのであると、ハイデガーは言うのである。

現存在が内存在であるとは、この「そこ」において、現存在がその都度すでに自らを自己自身に対して開き示していることなのである。現存在が内存在として自らを開示する方法として、ハイデガーは「情態性 (Befindlichkeit)」と「了解 (Verstehen)」について述べてゆく。

「情態性」とは、日常的な意味における「気分」や「気持ち」のことである。この気分において、現存在は自己自身を明らかにしているのであるとハイデガーは言うのである。

気分が示すのは、現存在が自らの存在を実存しながら、当の自らの存在に委ねられ、その存在を存在しなければならないことである。このような現存在の存在の特徴を、ハイデガーはさらに「被投性

(Geworfenheit)」と名づける。

「被投性」において、現存在は言わば自らの「そこ」へ向かって「投げられている」。言い換えれば、現存在は世界内存在として、世界の中に受動的に投げ込まれており、そして自らの置かれた「そこ」において生きてゆかねばならないのである。

情態性は被投性を現存在に対して被投性を開示するのであるが、また情態性そのものが、現存在がおのれ自身に向き直ることを避けている在り様でもある。

また「了解」とは、現存在が世界の内では出てくるもの（ここでは主として道具）を、適切に取り扱うことであるとハイデガーは言う。この了解が現存在に開き示すことは、現存在が「存在可能(“Seinkönnen”, 存在できること)」であることである。すなわち、現存在が自らに内在する様々な可能性のうちの一つを行為において現実化し、存在しているということ、了解は現存在に対して明らかにしているのである。

ここで言われている可能性は決して無制限に現存在の中から浮かび上がってゆくわけではなく、現存在の被投性に左右されつつ選び取られている。このように選び取られた自らの可能性を了解してゆくことで、現存在はそれを実現して生きてゆくことができるのである。

ハイデガーによれば、このような可能性の了解が可能であるのは、了解が「投企(Entwurf)」という構造を具えているからである。現存在は被投的に世界へと投げられているのであるが、投げられた現存在は、自らを自身の可能性へと「投げ込んでゆく」こともまた出来るのである。

さしあたって、現存在は世界の側から、すなわち出来合いの意味付けに基づいて非本来的に自らを了解している。しかし、固有な自己に基づいた本来的な了解の可能性もそこにはある。

了解にはある種の循環的な構造がともなうのであるが、ハイデガーはこの循環構造を積極的に評価しようとする。つまり、この循環に「正しい仕方に入ってゆく」ことで、現存在は世界内存在として了解しつつ存在している在り様を浮き彫りにし、自らに固有な存在へと向かってゆくことができるのである。

上で述べてきた、内存在としての現存在に具わる開示の働きによ

って、現存在は他者と区別されない「ひと」としての在り方から、固有の自己の存在へといたることが出来る。ここからハイデガーは、現存在の固有の自己を自らに開示してくる情態性として、「不安」の気分を取り上げる。

不安の気分において、現存在は世界の無意味性に直面する。言い換えれば、不安という情態性は、現存在に世界の無意義的な姿を開示しているのである。この不安の気分現存在を陥れるものは、しかし、現存在が世界の中で出会ってくる具体的な個物というわけではない。

現存在がそれに直面して不安になるところのものは「無」であり、それはすなわち世界そのものなのであるとハイデガーは言う。言い換えれば、不安の情態性において、それまで様々な意味を現存在に了解させてきた世界が、全く意味を欠いたものとして現存在に開示されてくるのである。

現存在は世界内存在として、日常的には「ひと」の在り様で世界の側から自己の可能性を了解し、投企している。しかし、不安によって世界が無意義化されることで、世界の側からではなく、自己自身から自らの可能性を了解することが出来るようになるのである。

ハイデガーによれば、このとき現存在は「孤独化 (vereinzelt)」されており、その投企の可能性を自己自身に委ねられてある。そして現存在は、おのれが全く自己自身に基づいて、その固有の可能性へと自らをさしむけてゆく存在であることを発見するのである。

ここで現存在は、言わば「一人性」のような様相を有するのではないかと考えられる。不安によって、現存在は世界内存在としての自己の在り様を発見し、「ひと」に溶け込んでいる自己自身の姿を発見するのである。ここから、本来的自己への可能性を、現存在は見出してゆくことが出来るのである。

ところで、現存在は、本来的には各自的に固有な存在なのであるが、それでもなお世界内存在として事物や他者と交渉しつつ生きている。このことは、現存在の存在の全体的な構造が、現存在の自己に先立ってあらかじめ与えられていることに基づいている。この、現存在の存在の全体構造を、ハイデガーは「関心 (Sorge)」と名づける。

関心という構造があらかじめ現存在の存在に与えられているため

に、現存在の自己性もまた、ここから説明されねばならないとハイデガーは言う。すなわち、現存在の自己は、関心に規定されているのである。故に現存在の自己の固有性もまた、関心に規定されて、意味づけられていなければならない。

この全体構造としての関心を、現存在は不安の情態性によって発見するのである。このことによって、現存在の自己は、関心という構造に基づけられたおのれ自身の姿を見出し、固有な自己への契機を得ることが出来るのである。

では、自己が固有であるとは、具体的にどのようなことを意味するのであろうか。ここでハイデガーが着目するのは、「死」の現象である。

関心は現存在の存在の全体構造であったが、死は現存在に内在する「終わり」の可能性である。この死という終わりを視野に収めることで、現存在の全体を把握することが出来るのであるとハイデガーは述べる。

死は、どこまでも各自の現存在が引き受けなくてはならない現象である。そして、この現象において、現存在の固有性が最も先鋭的に現れてくるのである。

人間は死んでしまっただけで存在できないから、現存在にとって死はどこまでも可能性としてしか現れていない。しかし、ハイデガーは、死が現存在にとって可能性であることの重要性を説く。その可能性は、おのれが存在しなくなるという可能性であり、日常的な可能性とは異なる際立った可能性だからである。

この死という可能性へと現存在が態度をとることを、ハイデガーは「可能性への先駆」として呼び表す。すなわち、死という可能性は、全く自己自身から発露している、自己に固有の可能性なのであり、その可能性から自己自身を了解しながら、現存在は固有の自己自身として存在することが出来る。そしてここにおいて、現存在は「ひと」の支配から脱しつつ、自らの最も固有な可能性において自らの「本来性 (Eigentlichkeit)」へ向かうことが出来るのである。

死において現存在は、自己自身以外からは現れてくるはずもない究極の可能性と関わる。そのとき、現存在は日常的な世界内存在として規定された在り方を離れ、ただ一人としてある自己自身と関わりあうのである。このことは、死の可能性への先駆によって、現存

在の自己が当の可能性に関わる自由を得たことに基づいている。

死への可能性へと関わることを選択することは、日常的には、いつもすでに回避されている。言い換えれば、非本来的な選択を、現存在はすでにしまっている。死への可能性の選択は、すでになされた非本来的な選択を、もう一度選びなおすという仕方で行われる。そのとき、現存在の自己は、本来的な選択者として固有の自己を存在できるようになる。

ただし、やはり依然として現存在の本来性と非本来性を切り離して考えることは出来ない。なぜならば、本来性へといたるためには、非本来的に存在している現存在を前提しなければならないからである。そして、現存在は本来性からまた非本来性へと帰ってゆくとも、ハイデガーは述べている。つまり、現存在の本来性は決して恒常的な状態となるわけではなく、現存在は日常性にその都度回帰してゆくのである。しかし、ふたたび自己の本来性を追求してゆくための可能性は、常に日常的な現存在の自己において見出されているのである。

現存在はここにおいて固有な本来的自己にいたることが出来るのであるが、この固有な自己の在り様は、ハイデガーが批判するところの客体的自我とどのように異なるのであろうか。

ハイデガーは、現存在が本来的自己へと向かってゆくことが可能であることの証明として、「良心 (Gewissen)」の現象について論じる。この良心の声無き声が現存在に告げる現存在自身の姿が、「負い目ある存在 (Schuldigsein)」である。ハイデガーによれば、「負い目があることとは、何かについての「根拠であること」として形式化出来る。

現存在が被投的に、すなわち世界の内へ投げ込まれてある存在であることは先に述べた。この被投性以前にさかのぼって、自らが現に「存在し、かつ存在しなければならない」という事実を、現存在はどうすることも出来ないのである。しかし、この被投性の故に、現存在は実存し、自らの存在可能の根拠であること出来ると、ハイデガーは述べるのである。

このように、自己がおのれの根拠「では無い」のにも関わらず、その「無い」ことによって現存在は自己自身の「根拠である」と言えるのである。この点に、現存在の自己の存在論的意味を、ハイデ

ガーは見出すのである。

現存在の被投性は、「では無い」ことの「無」性によって構成されている。現存在の自己は、この被投性の「無」性を引き受けることで、すなわち、自らが根拠で無いのにも関わらず、根拠であることを引き受けることによって、自己であることが可能となるのである。

このように、現存在の自己は、決して客観的自我と呼ば表されるような類の在り方をしてはいない。そうではなくて、あくまでも世界の影響下に置かれた「被投的自己」として、その都度自己であることを引き受けながら存在させられているという仕方で、現存在の自己は存在しているのである。

これまで分析してきたハイデガーの存在論において、「自己」なるものはどのような在り様をわれわれに示していただろうか。それは、現存在の「事実(Faktum)」として、言い換えれば、現存在は世界内存在として存在する限り自己として存在しなければならない、という「事実」である。すなわち、ハイデガーの語る自己は、現存在における「自己という事実」なのである。

この事実は、「ひと」として固有の自己を存在していないときでさえ現存在を規定する。現存在は本来的な仕方であれ、非本来的な仕方であれ、決して「自己を欠いて」存在することは出来ないからである。

さらに、現存在は被投性を有しており、現存在の自己は自らの基づけられているところの存在と、被投的に関わることしか出来ない。すなわち、「負い目ある存在」として、現存在の自己は被投的に自己自身を存在しなければならないのである。

「自己という事実」は、現存在が自己として存在しなければならないことであるから、どこまでも被投的な事実である。現存在は、「負い目ある存在」として、決して自ら選び取ったわけではない「自己という事実」を引き受けることによって、実存するのである。